

医王寺（相知）（1/2）

分野 歴史

地域 相知

◎地図・写真・統計資料など



木造薬師如来立像
(もくぞうやくしにょらいりゅうぞう)

(『佐賀県の文化財』より)

芙蓉山医王寺は永徳三年（1383）秋、九州北西部で活躍していた武士集団の松浦党、とりわけ上松浦党主で、岸岳城主波多安房（はたあわ）守源武（たけし）が、道元禅師第七世の法孫無着妙融（むちやくみょうゆう）大和尚（真空禅師（しんくうぜんじ））を開山として迎え建立された曹洞宗の寺院である。波多家の隆盛時には寺領450石、1里4方を境内とし、安居（あんご）の修行僧1,000人を数え、曹洞宗九州無着派の3本山（肥前松浦の医王寺、肥前大和の玉林寺、豊後国東の泉福寺）の1つといわれた。現在の住職は41代目に当り620年余の歴史をもつ古刹である。

開山無着和尚は、鹿児島大隅出身の人で、九州一円はもとより遠く山形・岩手の地まで布教に赴き、曹洞宗の教線拡張につとめた無着派の祖である。後小松天皇は無着和尚に紫衣と真空禅師の称号を与えている。

こうした由緒をもつ医王寺は明治に至るまで、曹洞宗の修行道場として多数の僧侶を養育し、輩出してきた。その間、曹洞宗大本山の1つ総持寺に輪住として3人を昇住させ宗務を司っている。

医王寺境内にあるもの

■木造薬師如来立像（県指定重要文化財）

指定年月日/昭和58年3月22日

所在地 / 東松浦郡相知町大字黒岩183医王寺

天山山系の西端に近い陣の山の山裾に、松浦川に面して芙蓉山医王寺がある。当寺は、永徳3年（1383）無著妙融を開山として岸嶽城主源武が開基したと伝える曹洞宗の古刹である。かつては瑠璃光山と号し、往時には末寺39カ所を教え、勅使門を備えていたという。

当寺本尊である本像は、像高136cm。両手首先、両足先を除いて頭頂から裳先まで桧の一材から彫出し、内割りはない。

肉髻を高く盛り上げ、螺髪を粗く刻みつける。頭は面長で、眼窩の先を鋭く切り上げ、目は瞼広く伏目にして切れ長、唇を固く結ぶ。肩幅広く張り、上膊（上腕）から袂にかけては誇張した張りはなく、自然に処理する。体軀には胸や腹、大腿の大幅な厚みはなく、緩やかな膨らみを表す。衣はややざっくりと着、衣紋線、胸前は衣の開きに沿って平行に、両脚部には左右相称に両腿側から弓状に繰り返す。

以上、肉髻の高さや螺髪のコツ、峻厳な面相、両脚間のX字状の衣紋線の処理及び丸彫りの構造は平安時代前期の特徴を備える。一方、体軀はその厚みを控えた幅広のものとなり、平安時代後期への移行を示す。また、衣のひだは平行線状の型式化したものから、本像の制作は、平安時代中期に求めるのが最も妥当であると考えられる。

～2/2へつづく～

◎引用・参考文献（出典）

◆開山縁起

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html

医王寺（相知）（2/2）

分野 歴史

地域 相知

◎地図・写真・統計資料など



肥前鐘（ひぜんしょう）

（『佐賀県の文化財』より）

～1/2からつづく～

■肥前鐘（永和2季丙辰 8月吉日の銘あり） 県指定重要文化財

指定年月日/昭和36年3月24日

所在地/東松浦郡相知町黒岩字宇土183 医王寺

肥前鐘は鎌倉時代後期から南北朝にかけて肥前国上松浦山下庄で鑄造された銅鐘で、現在全国に6口の存在が知られ県下ではこの1口だけである。肥前鐘の特徴的な点は竜図が方柱をくわえ、竜頭上部の宝珠の中心に3口の玉が品字型に透し彫りされ、その周縁にハート型の透しが入っていることや、駒の爪が2段になっている点などである。また乳の頭部中央に小さな突起があることなどもあげられる。

医王寺の鐘は、撞座の文様・竜頭の形・紐等の線描が端整優美で肥前鐘として最も完備されたものの1つである。銘文によると永和2年（1376）鑄造され彼杵庄父賀志村宇都宮（現在：佐世保市宮村神社）に奉納されたものである。総高83.2cm、鐘身高82cm、口径49.5cm、乳郭は4カ所に分かれ乳は1区に4列4段に配されている。

地の部分には次の陰刻名がある。

- （第1区）西海路肥前州彼杵庄内」
父賀志村」宇都宮
- （第2区）諸行無常是生滅法」生滅：
己寂滅為樂」大檀那 駿河
守藤原」朝臣通景 敬造」
院主 義英
- （第3区）貴賤男女」大小助縁」下可
勝数」永和二季辰丙八月吉日
- （第4区）作者有智田祖久

◎引用・参考文献（出典）

◆開山縁起

◎エピソード・伝承・うんちく など

医王寺の本堂は木造平屋建ての入り母屋造りで、屋根は棧瓦葺（さんがわらふぎ）。安永（1778）に建てられた。室内は正方形に近く、内陣や広間、土間などで構成されている。過去3度改修されたが、創建当時の様式が踏襲されていて曹洞宗の本堂構造をよく伝えている。文政4年（1821）建立の山門は、本柱の後ろに控柱（ひかえ）を立てた『薬医門』と呼ばれる形式である。棧瓦を葺いた切り妻造りの屋根を支える部材『曇股（かえるまた）』が、屋根飾りの『懸魚（げぎょ）』『桁臈（けたかくし）』と融和し、独特の意匠を色濃く伝えている。このように医王寺の本堂と山門は、曹洞宗寺院の様式を今に伝えていることが評価され、登録有形文化財となっている。

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html